

おお大勝利

令和3年度 山東サッカー部報第3号 (7月3日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

県リーグ2部Aにて 3連敗スタート

6月13日(日)、20日(日)、26日(土)と立て続けに県リーグ戦が行われました。5月末と6月頭の県総体までコロナ感染症対策として県リーグがストップしていた関係で、県総体が終わってからあわただしく県リーグがスタートしました。**ここから、選手権予選が始まる10月までの間に、2巡14節を消化する過酷な一年**となります。通常、県総体開始までの4月5月で、4節か5節は消化しているのが普通なだけに、ほぼ休みなく県リーグが入ってくるようになる。

山東は例年、県リーグで1巡(7節)するまで3年生は引退せず県リーグを戦う伝統で来た。今年もそのようにしたいところだが、そうすると今年は夏休みまでかかってしまい、受験勉強(や学校祭の準備・・・)に影響が出る。そんなことから、例年と同様の7月前半のタイミングまで戦うこととなった。

さて、13日第1節の相手は**米沢工業**。会場はその米工G。ベンチにいつも鎮座されます**清野総監督(後援会名誉会長)**は足先が痛くなる「とある贅沢病」により欠席¹。今年の県リーグは無観客で行われているので、**後藤報道局長**はベンチ内から取材してもらう。清野さんと同期の**工藤先輩**はわざわざ米沢まで応援にお越しになったのだが、失礼ながら敷地の外に出てもらった(工藤先輩、次はベンチ内からぜひ観戦して下さい)。

米工はスピードを生かしたダイレクトな攻撃と気持ちのこもった球際に例年特徴がある。今年のチームもまさに米工! 序盤は互いに決め手を欠く膠着状態ながら、迷いのない米工の方が若干優勢。山東は今年ただでさえ層が薄いのに、故障者を抱え、絶望的なほど層が薄い。厳しい戦いを乗り切らなきゃいけない。前半15分、DFラインのボール回しを簡単に奪われ、あっさり失点。地区総体のような耐える戦いをするためには、こういう自滅系の失点をしてはいけない。ただし、**DFでボール回しをした選択自体が悪いのではない**。ボール回しをするための準備ができないままボールを受け、相手のプレッシャーの中必要以上に慌ててしまうことに問題がある。サッカー選手たる者、競技を始めたばかりの頃まさにそうだったように、「自分にボール来てほしい」「自分にボールちょうだい」という気持ちがなければだめ。それがいつの間にか、ボールを持ってない自信のなさから「なるべくボールは自分のところに来ないでほしい」などと思う選手が出てくる。厳しい言い方をすれば、**ボール来てほしくないと思うくらいだったら、サッカー辞めた方が良く**。前半0対1。

後半は徐々に両チームの地力の差が出た。米工は競り合いを避ける選手がいないし、常に前線が裏のスペースを狙っている。山東は最初がんばっていたが、**体力的な問題**もあるし、**集中力という頭の体力のなさ**もあり、後半の後半からはカバーリングをサボり、「あいつが跳ね返し

¹ その病気、私も3月に1回、5月に2回発作が起きて、苦しい時間を過ごしました。いまは毎日服薬し、安心して飲酒できる状態を作っています。

てくれるはず」という希望的観測が先立つ。**ディフェンスにおいては最悪のことを予想して常に準備する（この場合カバーリングする）必要があるが、今年に限らず山東生の傾向として、苦しくなると効率的に立ち回ろうと自己流に走る。**それが守備全体の効率性を求めた組織を作ることにつながればよいのだが、そういうリーダーシップを欠いたまま、土壇場でサボる。結局後半も2失点して、**0対3の完敗**。米工が外さなかったら、GKがコーセーじゃなかったら、もっともって失点してました。こちらもGKと1対1のシーンを作ったり、攻める場面はあったものの、全体としては0対3は順当な結果。甘さを痛感する試合となった。

20日第2節の相手は**米沢中央B**。初めての対戦です。Aとは山東が1部にいるとき何度か対戦しているが、Bとは2ブロックある2部の中でいつも逆ブロックだったということ。珍しい。会場は同じく米工。いつも思いますが、上山明新館と似ている。そんなことはどうでもいいが、この節は後援会の皆さんはいらっしゃらず。「こんなときに（取材がないときに限って）勝っちゃうじゃないか」なんて思いがチラッと頭をよぎった自分が、今となっては恥ずかしい。全体のバランスの取れる**2年グッチ**が県総体での故障から復帰したので、3バックで守備的に戦う（グッチは3の真ん中）。

すると、米中Bはスキルのある選手がいるものの、やたらとディフェンスに手数をかける山東の前に攻めあぐむ。ディフェンスでボールを回すものの、有効に山東ゴール前に迫ることができずにいる。山東のゲームプラン通り。ただし、残念ながら、良い形でボールを奪っても山東も相手ゴールに迫ることができない。シュートに持ち込む前に、アタッキング3rdの入り口で、ボールを失っている攻撃が成り立たない。前半両チームスコアレス。

後半に入っても同じ展開。ボール保持は米中B。守りを固めるのが山東。守るのは仕方ないのですが、得点のにおいがしないようでは、ただ耐えているだけ。正直、憶えているような攻めはなかった。逆に、**相手に動かされているからだろうか、単純に基礎体力が不足しているからだろうか（両方正しいと思われる）、足を痙攣させる選手が多かったことは憶えている。**後半42分、左SBが痙攣してピッチを去った刹那、ベンチもSBに注意を向けた直後、その左サイド（米中Bからすると右サイドから）を鋭くえぐられ、すばらしいクロスを入れられ、それをニアサイドで鮮やかにヘディングで合わされ、**とうとう失点**。ここまで耐えてきたのに・・・**何ともったいない失点**だろうか。でも、薄い所を的確に突き、すばらしいクロスとヘディングを土壇場で決めた相手が一枚上手だった。

ただですね、この失点には、走り負けとか競り負けというものもあるにはあるのだが、連携のトレーニング不足というかサッカー理解の不足が大きく絡んでいる。アウトサイドで相手Aのドリブルに対峙しているとき、その相手の外側をオーバーラップする相手選手Bが出たときどうするのか。対処方法としては三つある。①1対2を作られる前にボールに（Aに）チャレンジして奪ってしまう、②Bをインサイドの選手（例えばCB）が横にずれてカバーして、SBなどはそのままAに対峙する、③Aに対峙していたSBがBに（外側に）マークをずらし、インサイドの選手（CBやボランチ）またはSHがAのマークを引き受ける。もちろん、①が一番いい。相手に余裕を与えないディフェンスができる選手が最も優秀。でもそれができないとき、どうやって1対2を回避して2対2を作るか。トレーニング不足（サッカー理解不足）だと②を選んでしまうというか、流れでそうなっちゃうのだが、これはうまく行かないことが多い。CBがインサイドから端のアウトサイドまでスライドするには距離があり非効率で間に合わないことが多い。間に合うくらいアウトサイドに寄ってしまったら、Aにインサイドを突かれたとき肝心の「中」が手薄になっちゃう。ということで、**迷わず選ぶべきは③**。BがAを追い越す前に（後追いすることなく）Bへとマークをずらしてよい。「Aのマークは誰かがやっ

くれるだろう」もしインサイドの選手や SH から声がかからなくとも、そのように発想して**勝手に動いて良い**。本当は声かけなきゃいけないけどね。この③のディフェンスができていたら、失点はなかった。指導不足ですね。

26日の相手は山形城北。城北とは地区総体でも対戦しており、その強さはよく知っている。地区総体同様に、耐えて守る。まずはそれができないと、締まったゲームにはならない。城北はスピードのある選手がいるが、山東が引いて守ると裏のスペースがないため、地区総体では攻めあぐねていた。その戦いしかできないから、うちとしては同じゲームプランでも仕方ない。ポイントは粘っているうちにカウンターから得点できるかどうか。ここまで県リーグ無得点。会場は山形明正。**後藤報道局長**のみいらっしやり、ベンチ内から取材してもらう。

試合が始まると、やはり地区総体と同じ試合展開。インサイドは3人いるCBで手厚いが、アウトサイドへの対角のボールに対して両サイドのWBが繰り返し裏を取られる。**右WBコンニャクこと翔太**などは、ジャンケンでたとえるなら、ジャンケンの発声の時に前もってチョコキ出されていて、ポンの時に同じチョコキ出されても、パー出して負けてる。読み合い負けではない。相手が対角に裏を突こうとする攻撃が読める状況なのに、わざわざプレスバック遅れて裏を取られている。サッカーを解釈できない。オフザピッチで会話していても、**一人10秒先の会話の世界にいて「時空を歪ませる」と噂の選手**であるが、**オンザピッチでは10秒遅れている**。その選手が簡単に裏を取られ、えぐられて、ゴールを横切るボールを相手に合わされ、失点。ベンチでは、顧問もバックアップメンバーも、目の前のコンニャクにあーだこーだ言ってる。さぞ逆サイドが良かったことでしょう。しかし、そのコンニャク、前半40分に得たFKにおいて、**相手が跳ね返した浮き球をそのまま左足インサイドボレーで叩くと、すばらしいコースに飛び、同点シュートとなる**。確かにコンニャク、これまでもこぼれ球に合わせたシュートで可能性を感じさせたことがあったが、それがまぐれではなかったということ。もちろん、それまでコンニャクにウダウダ言ってたベンチは大盛り上がり。**同じ宮川中出身で、指を骨折中の2年GK ジャッカルことサトウ**は「コンニャク帳消しだぞ」などとほめてんだか、傷に塩を塗ってんだかわからないことをベンチで叫ぶ。1対1で前半終了。そうそう、前半に**3年オニコシ**がタッチミスによりハンドを与えましたが、城北が外してくれて2失点目を食うことなく済んだ。「これは転機になりそうだ」と感じた後のコンニャクの同点シュートでした。

両チームの力の差を考えれば、同点での折り返しは望外の結果。後半もしぶとく戦うのみ（コンニャクは「足が攣りそうです」と申し出てハーフタイムで交代）。その後半、内容はよく覚えていないが、前半と代わり映えのしない試合だったはず。城北がボールを保持してボールを動かしてくるのに対応してスライドを繰り返す山東。引けば人数がいるし、裏のボールにはGKコーセーがいるし。なかなか粘っている。しかし、後半25分、城北の選手のドリブルを止められず、個で剥がされ、追加点を与えてしまう。「まぐれ当たり」のようなゴールで盛り上がった山東でしたが、実力で差のある相手に先に点を与えてしまい、希望が遠のく思い。でも、まだまだ時間がある。諦めるには早すぎる。「おしゃべり野郎」ジャッカル2が「ラストだぞ」と**意味不明な激励をピッチに送っている**。「バカ野郎、まだ15分もある。何がラストだ。」とベンチで一喝する。「まだ時間あるぞ」とピッチに声をかける。

この時には、その後起こる展開は読めていなかった。**頑張ってるがパスは絶望的に通らない1年マサツナ**に疲れが見えたため、**同じF中出身のマゴロクことカイ**に交代させた途端、**3年FWダイキ**が相手DFのコントロールミスを見逃さず、それを奪いGKと1対1

² ちなみに、ジャッカルというあだ名は、ジャッカルというプレーを一躍有名にしたラグビー日本の姫野選手に似ていることから、つけられました。

を作る。マゴロクは元気いっぱい走り、ダイキの横に顔を出す。「ダイキがシュート打ってもいいが、マゴロクに横パスしたらマゴロクはドフリー、ゴールはガラ空き・・・でもダイキ見えてないだろうな～」などとダイキさんを過小評価してました。**ダイキが冷静に横パスし、マゴロク、これまた冷静にワントラップし、無人のゴールに蹴り込み、同点ゴールとなる。**ベンチにいる後藤さんは「もう二度と見られないと思っていたゴールが、また見られた」と興奮気味に語る。後藤さん、この試合では見られないと思ったということですよね。しかし、同点で喜び、ゴールにボールを取りに行き逆転を目指そうという気配はない。「**何でボールを取りに行かないんだ（何で同点で満足して勝ちにいかないんだ）**」と顧問の久世先生が不満げ。仰る通りです。「まだ時間 10 分あるぞ」とベンチから監督（私）が叫ぶ。「変な失点するなよ」という意味でもあり、「勝ちも目指せるんだぞ」という意味でもある。この、先と同じ激励が予想外の結果をもたらす。

翌日、城北の監督から聞いたのですが、残り時間の少ない段階で同点とされ、かなりガックリきていた城北の選手たち。こういう形で勝負弱く勝ち点を失うのかと下を向いていたそうです。ですが、**相手監督（私）が繰り返し「まだ 10 分あるぞ」「まだまだ時間あるぞ」と叫ぶものだから、「まだ大丈夫か、よしゴールをめざそう」と顔が上がり、必死に攻めたら追加点につながったとのこと。**「何だそれは、俺のせいかな」とやるせない気持ちになった。そうなんです、その後、勝負弱いのは山東でした。後半 40 分、CK のこぼれ球だったか、ゴール前のルーズボールの反応遅れて、相手にシュートを許し、また先を越される。**2 対 3。**アディショナルタイムにも、右サイドを相手の左サイドのすばらしいドリブラーから鋭くドリブル突破され、ゴールと同時にタイムアップとなる失点を許し、**結局 2 対 4 で敗戦。**「喜ばせといて最後はこれか」とガックリ。まあ、実力差を考えると、よく頑張ったのかもしれない。

これで、**リーグ戦 3 連敗。**開幕と同時に連敗街道を突っ走ったのは、Y1 ではあったが、**Y2 では初めてのこと。**昇格を狙うどころか、早くも降格が頭をよぎります。まあ、力が圧倒的にない学年なので、仕方がない。でも、3 年生には最後まで頑張ってもらいたい。好きで入ったサッカー部、残り 2 節、高校サッカー生活を堪能し尽くして、後輩に山東サッカー部 3 年生の戦いを見せつけて、全うしてもらいたい。たとえ結果が出なくても。

3 年生の最後の 2 試合、応援よろしくお願いします。

7月4日（日） Y2A 改正第 4 節 羽黒 B 戦 @東根中央公園 12:00 キックオフ

7月10日（土） Y2A 改正第 5 節 鶴岡工業戦 @山形明正高校 12:00 キックオフ